

1 研究主題

楽しく、分かる授業

～みんなが考える、表現する、吟味する、獲得する、川東スタイル授業～

2 信念

子どもが主役となる川東スタイル授業(*1)の実践を積み上げ、
資質・能力(*2)を育成する。

*1 「川東スタイル授業」

川東スタイル授業とは、再構成を促す本校独自の授業モデルのことである。日々の授業での主体的・対話的で深い学びにより、資質・能力を育てるために、以下の視点を大切にしてきた。

- ① 学校教育目標と授業をつなげる。
(学期ごとの教育課程編成修正作業で作成した年間計画をもとにした授業づくり)
- ② 考え、表現し、吟味し、獲得する。
- ③ 内容研究と教材研究をする。(授業前に、指導要領の内容分析、教科書の教材分析を行う)
- ④ しかけを大切にする。
(環境づくり・状況づくりを通して、児童の意欲や対話、思考力が高まる手立てを事前に準備する)
- ⑤ 単元を通した課題設定(授業は単元で計画する)
- ⑥ 知識や技能の確実な習得(再構成のもとになる知識・技能の習得)
- ⑦ 単元を通した課題に対する自分の考えをもつ(常に自分の答えを再構成していくために)
- ⑧ 吟味の場면을授業の中に設定する。
- ⑨ 授業の中で「読む」「書く」「話す」「聞く」の学習を意図的に入れ、考えを言葉で表現できるようにする。
- ⑩ 生活から入り、生活にもどす(学びと生活をつなげる)。

校内の研究授業では、これらの視点を意識し、どのようにすれば児童が探究的に学び、自己調整力を発揮して学びを創っていくことができるのかを検証し、教師の役割や有効な具体的手立てを共有してきた。

「川東スタイル授業の3か年計画」(平成31年度～令和3年度に確立)

1年次(平成31年・令和元年度):「理論の確立」

各教科等における探究の過程を明らかにする。

教科等横断的なカリキュラムを完成させる。

2年次(令和2年度):「実践をくぐらせ、理論の修正」

各教科等の探究の過程を、授業を通して修正する。

教科等横断的なカリキュラムを、実践を通して修正する。

3年次(令和3年度):「川東スタイルの完成と発展」

2年次までに創造した川東スタイルを日常化する。

また、その過程における教師の役割や具体的手立てを明確にし、共有する。

各教科等の探究の過程で、子どもがどう伸びたかを検証する。

教科等横断的なカリキュラムで、子どもがどう伸びたかを検証する。

令和4年度

- ・川東スタイル授業を日常的に行う。
- ・研究授業等で「楽しい」「分かる」授業とはどういうものか、そのための教師の支援を明らかにし、日々の授業のさらなる充実をめざす。
- ・「探究」「基礎」の2部会をつくり、児童が探究的に学ぶための方法を得るための教師の手立てと、児童の基礎学力の定着や家庭学習の充実のための手立てについて研究する。

*2「資質・能力」

- ・学校教育目標に向けての育てたい資質・能力「探究・協働・自立・創造・健康」

3 授業づくりの理念

- ① 「子どもが主役、教師は黒子」の授業づくり
- ② 日々の授業の充実～本気で川東スタイル授業を実現～
- ③ 授業で学級経営する～生徒指導機能を生かした授業～

4 研究テーマについて

現職教育の目的は、学校教育目標が示すめざす児童像(育てたい資質・能力)を、学校生活の大部分を占める日常の授業の充実によって実現することである。

学校行事や様々な活動によって学校教育目標に迫る部分もあるが、中心となるのは、日々の授業実践である。そこで、現職教育テーマを、育てたい資質・能力の実現を目的とした授業づくりに関わるものとした。

教師には、児童の力を育てる質の高い授業を提供する責任がある。そのため昨年度は、「共に学び、自ら学びを創る子の育成～主体的・対話的で深い学びによる川東スタイルの日常化～」をテーマに、研究授業や実践研修を行い、日々の授業改善に力を入れてきた。成果としてこれまで研究を積み上げてきた川東スタイル授業の姿が明確となり、全教員が共通理解することができた。その中で、授業づくりや実践における準備、教師の役割や具体的手立て等も明確になった。

しかし、その一方で研究授業や実践研修で得た成果を、日々の授業に十分に生かしきれていないという課題もあった。さらに、国・県の学習状況調査児童質問紙の「授業は楽しいと思いますか。」「学校は楽しいと思いますか。」という質問の回答では、伸びが見えたものの十分とは言えない結果であった。その意味では、目指した川東スタイル授業の日常化において満足できるものではなかったと言える。したがって、研究授業で得た成果を一過性の教師の学びに終わらせず、日々の授業で工夫しながら実践し、積み上げ、すべての児童が「授業が楽しい」と思える川東スタイル授業をもっと本気になって目指す必要があると考えた。

そこで、今年度は、研究主題を「楽しく、分かる授業～みんなが考える、表現する、吟味する、川東スタイル授業～」とし、これまで研究してきた川東スタイル授業の実践をさらに積み上げ、研究授業等で各教科における「楽しい」「分かる」授業とはどういうものか、そこでの教師の支援を明らかにし、日々の授業のさらなる充実を目ざすものとする。

それでは「楽しく、分かる授業」とは何か。当然ながら、ただ楽しいだけでいいというものではない。「楽しく、分かる授業」として大切な視点は、児童が授業の中で行う「考える、表現する、吟味する、獲

得する」これらに意義を見出し、楽しいと感じているかどうかである。

「楽しく」とは、まず、児童自ら問題の解決に向けて見通しをもち、それについて自ら考えたいと感じ、自分の考えをもつ楽しさである。次に、自分の考えを表現するという活動を行う。「話す」「書く」といった言葉による表現を行うことで、言語力の育成も図っていききたい。そして、対話によって考えを表現し合う中で自他の考えを広げたり、深めたりしていく。友だちの考えを解釈し自分の考えと比べたり、友だちの考えを自分の言葉で表現したりするやりとりの中で考えが深まっていくことを実感し、そこに楽しさを感じるものが「吟味」である。単に「表現し合う」だけでなく、「吟味」しなければ「獲得」まで至らない。互いに考えを伝え合い、吟味する対話的な学びの中で、それぞれの考えを出し合い吟味し、自分の納得解・最適解を出すことが「獲得する」ことである。そして、それらの学習の過程と成果を振り返り、よりよく問題解決できたことを実感する楽しさである。こういった「考える、表現する、吟味する、獲得する」ことに楽しさを感じるものが研究テーマの「楽しく」である。ここで重要なことが「楽しさ」だけで終わるのではなく、「分かる」まで到達する必要があるということである。

「分かる」とは、知識・技能の習得だけにとどまってはならない。「考える、表現する、吟味する、獲得する」の四段階の学習過程の中で、知識・技能を確実に習得し、それらの知識・技能を相互に関連付けてより深く理解したり、断片的な知識を関連的な知識、総合的な知識へと組み立て・組み替え、新たな解を生み出したり、情報を精査して考えを形成したりすることが「分かる」ということである。四段階の活動を行う中で「分かる」に到達することで、学びの楽しさを感じる、そのような川東スタイル授業を日常的に実践していきたい。

このようにともに学ぶ授業によって、認め合う人間関係をつくる、生徒指導機能を生かした授業ともしていきたい。「授業で学級経営する」の言葉のとおり、学校生活の大部分を占める授業によって学級経営を充実させるということである。

また、児童の姿や、児童質問紙調査の「学習を自ら計画立てて行っていますか。」という回答結果から、探究的に学ぶことや学習を自ら計画立て自己調整力を発揮して学ぶことが本校児童の課題であることが分かった。そこで、今年度は「探究」「基礎」という2部会を設け、学ぶための土台をつくりたい。探究部会では、児童が探究的に学ぶための方法をつかむための教師の手立てを研究する。基礎部会では、児童の基礎学力の定着や家庭学習の充実を旨とした取り組みや研究を行う。

5 研究仮説

児童全員が、「考える、表現する、吟味する、獲得する」川東スタイル授業の実践をさらに積み上げ、研究授業等で各教科における「楽しい」「分かる」授業とはどういうものか、そこでの教師の支援を明らかにし、実践することで、児童は、自らの考えを深め、学ぶ楽しさを感じることができる。

また、「探究」「基礎」の2部会で、児童が探究的に学ぶための方法や教師の手立てを研究したり、児童の基礎学力の定着や家庭学習の充実を旨とし研究を行ったりすることで、学ぶための土台づくりがなされ、川東スタイル授業の充実を図ることができる。

6 研究方法

(1) 研究授業

本年度は、年間4本の研究授業をもとに研究する。

【研究授業】

各授業における四段階の活動により、「楽しく、分かる授業」の姿を明らかにする。明確になった点

を日々の授業実践に生かす。

- ・例年、低・中・高学年各2本（合計6本）を行っているが、本年度は香小研の授業が当たっているため、現職教育の校内研究授業は4本で行う。
- ・香小研等の授業は、本校の研究授業に含む場合がある。
- ・事前研修会・提案資料様式
原則として、授業公開日の3週間前に行う。（参加者は現教部、授業者、関係学年団、教科部員、若年教員、希望者）

提案資料様式は、以下を基本として、5ページにまとめる。

- ① 授業構想シート ② 「楽しい分かる授業のために」主張点・主張点解説
- ③ 教材観・児童観・指導観 ④ 単元構想 ⑤ 本時案

(2) 日々の授業改善のために

① 「楽しく、分かる授業」について協議

年度はじめに、「楽しく、分かる授業」とはどのような授業かを協議し、四段階の活動における教師の役割や具体的手立てを明確にする。

② 実践授業（校内公開授業）

研究授業（年4本）とは別に、実践授業（校内公開授業）を行う。研究授業の授業者以外の者が実践授業を行うことで、研究授業を含め、全教員による「一人一公開授業」とする。

【実践授業】

- ・火曜日6校時に、2～3名が同時に授業を公開し、その後、授業別に討議会を行う。
- ・参観者はいずれかの授業を参観する。

③ 探究部会・基礎部会

- ・探究、基礎の2部会に分かれ研究・実践を進める。
- ・学期に2回程度行う。必要に応じて適宜実施する。
- ・主な研究・実践内容（例）

探究・・・探究タイム（3～6年生週1回）を設け、児童が好奇心、探究心を培い、探究の方法をつかむ。

探究ノートの充実、探究発表会 等

基礎・・・パワーアップタイムの充実・教室環境

「家庭学習の手引き」作成・自主学習への支援の研究に学校全体で取り組む。

家庭学習の課題（宿題）の出し方の工夫、共通化 等

- ・数値目標（学カテストや児童質問紙）を立て、各部会で目標達成に向けて研究、実践する。

④ 現教だより

- ・現教部が「現教だより」を作成、配付し、成果と課題を共有する。

7 研究計画（※行事等により変更の場合あり）

4月12日 児童理解

4月28日 研究方針・内容についての協議・共有、総合的な学習の時間年間計画協議

5月12日 探究・基礎部会協議（1回目）

6月14日 研究授業①事前研修会

- 6月30日 研究授業①(5年生社会科)
- 7月7日 探究・基礎部会協議(2回目)
- 9月1日 研究授業②事前研修会
- 9月15日 研究授業②(2年生算数科)
- 9月22日 探究・基礎部会協議(3回目)
- 10月13日 探究・基礎部会協議(4回目)
- 11月22日 研究授業③事前研修会
- 12月8日 研究授業③(4年生理科)
- 1月10日 研究授業④事前研修会
- 1月19日 県状況調査の分析
- 1月26日 研究授業④(6年生総合的な学習の時間)
- 2月9日 探究・基礎部会協議(5回目)
- 2月16日 総括と来年度の展望

8 研究の基盤づくり

(1) 授業イメージの共有

① 授業の基礎・基本を大切にする。(授業規律の確立)

- ・板書、発問、指示、机間指導、教材提示の仕方、教材研究、単元観、指導観、ノート指導

② 「学びの主役」としての自覚を育て、学ぶ技を習得させる(子どもを鍛える)。

- ・「さぬきっ子学びの三訓」、話の聞き方、発言方法、音読、一人調べの方法、対話様式、ノート指導
つぶやき、反応、まとめの書き方、学習日記、机上整理、声の大きさ、姿勢 等

③ 「子どもが主役」の授業、授業づくり(教材中心、教師中心ではない)

- ・四段階の活動を通して、断片的な知を構成、再構成し、概念を形成する深まりのある授業イメージをもつ
- ・「知る」ことだけでなく「知ったことを使って問題を解決する」学習を意識
- ・個の考えを大切に、全体(集団)での学びが個に返ることで個が進化する学習を意識
- ・児童の主体性を育むため、ティーチングからコーチングへ教師の役割転換を意識した授業づくり
- ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現を図るICT機器の効果的な活用方法の実践

(2) 学級経営の充実

① 生徒指導機能を生かした授業

- ・一人ひとりの考えを大切にした豊かな学び合い
- ・ともに学び、高め合おうとする学び集団

② 「学びの空間」としての環境整備

- ・学ぶ意欲を高める環境づくり
- ・これまでの学びを生かせる環境づくり

③ 教師の温かい支援

- ・日常の授業から子どもを中心とした授業展開
- ・見通す、ほめる、振り返る

(3) 家庭学習の充実（※基礎部会で詳しく検討）

- 自主勉強用ノート（基礎）：既習内容の復習をすることで、学習内容の定着を図る。ノートのまとめ方を学年に合わせて児童に指導する。よい実践事例を紹介し、質の改善を図る。
- 自主勉強用ノート（予習）：次時の授業で行う学習内容に事前に目を通し、問題を解いたり、問題の解き方を考えたりすることで、課題を明確にし、その解決をめざして、主体的に授業に取り組むことができるようにする。
- 保護者への啓発：家庭学習の手引き、ホームページや懇談会、学年だより等で啓発を行う。

9 検証方法

- ・授業における児童の学ぶ姿を観察する。
- ・日常的に学習ごとの評価を丁寧に積み重ねる（個々の表現物の見取り）。
- ・研究授業、実践授業の質の向上を検証する。
- ・国・県学習状況調査や県版テストの結果から学習状況を検証、評価する。
- ・学校評価等による児童、保護者、教職員の意識調査の回答から検証、評価する。